

全科協ニュース

URL <http://jcsml.kahaku.go.jp>

全国科学博物館協議会 東京都台東区上野公園 国立科学博物館 ☎110-8718 Tel.5814-9857・9858 Fax.5814-9898 平成14年3月1日発行（通巻第183号）

特集 解説員の養成 博物館とお客様を繋ぐ 展示解説員の業務と研修

千葉県立現代産業科学館 普及課 上席研究員 山口 剛
展示解説員 宮下 朋子

当館は、だれもが産業に応用された科学技術を体験的に学ぶことのできる科学館として、平成6年6月に開館した。平成12年8月に入館者数が200万人を突破し、年間約34万人を迎えている。常設展示室は、「現代産業の歴史」、「先端技術への招待」、「創造の広場」から成り、映像ホール、科学情報コーナー、屋外展示もある。館組織は庶務・普及・学芸の3課から成り、職員は47名である（平成14年1月現在）。このうち、技術員8名、展示解説員9名が期間雇用職員（任期1年、継続可能）である。展示解説員（以下、解説員とする）は普及課に所属し、展示解説、受付案内、フロア業務、イベント補助等を行っている。平日は5人、それ以外は6人が出勤している。

新規に採用された解説員は内定後の3月下旬に5日間の事前研修を受ける。そして、4月からは先輩解説員とともに業務にあたる。事前研修では、館の業務全般にわたる知識の習得と接遇やアナウンスなどのトレーニングを受ける。しかし、これだけでは充分ではなく職員、特に先輩解説員からの指導を受けながら実務にあたっている。

以下、解説員の業務内容と関連した研修などについて述べる。

展示解説

（常設展示解説）

毎日午前と午後に各1時間「解説タイム」を設けて、3つの常設展示フロアの解説を各20分間行っている。また、団体などの希望があれば随時「解説ツアー」も実施している。さらに、お客様からのご要望があれば適時解説を行う。解説員はお客様の年齢や関心の度合いなどに合わせた適切

な解説を行うことが求められている。

新人解説員は、各フロアのシナリオに沿って解説が行えるように、まず、先輩解説員の指導を受けながら自己研修を行う。そして、採用から約3ヶ月後に学芸・普及課等の職員の立ち会いのもとに「仕上げ」の解説を行う。参加者はその場で評価用紙に所見を記入し、口頭でアドバイスも行う。評価の観点とは、説明（わかりやすさ、時間、展示物の指示の仕方、お客様の誘導）、発声（しゃべる速さ、声の大きさ、発音）、態度（姿勢、目配り）等である。新人解説員はこれらを自分自身でまとめて報告書を作成し提出する。さらに、年度末には「解説ツアー」の「仕上げ」を実施する。これらの過程を経て、より適切な解説を提供できるようになる。

展示に関する知識は、展示物や解説パネル、常設展示解説書等から得ることはもちろん、研究員から提供される資料、解説員自らが探した文献資料等も重要である。開館以来こうした資料がかなり増えたので、今年度は、これらを



毎日行う朝礼・終礼

ファイルし直し、同時に資料情報をデータベース化して活用しやすいように改善した。また、役立ちそうなウェブサイトも活用できるようにした。解説員は、自らこれらを利用し、新たな知見を吸収し、解説に役立てるようにしている。その他、必要であれば研究員が研修を行うこともある。(特別展の解説)

当館では年に一度特別展(有料)を実施している。会期中、午後の1時間に展示解説を行う。これは全解説員にとって毎年初めての経験になる。研修は、特別展担当研究員が中心になり、約1ヶ月前から終礼後に特別展に関する説明を行う。また、解説員は関連資料をもとに自己研修も行う。展示完成後に、シナリオに基づく20分程度の「仕上げ」の解説を会場で実施し、研究員等より指導を受けた後にお客様に対して解説を行う。

(科学館たんけん隊)

「科学館たんけん隊」は、子供にも解説に耳を傾けてもらうねらいがある。「指令書」というワークシートの問題を約30分かけて解いてもらった後に、たんけん隊の隊長である担当解説員が参加者と展示室をまわり、答え合わせと解説を行う。解説員には事前に簡単な解説案が示されているが、参加者の年齢層、関心の程度などを考慮したわかりやすい解説が求められる。

受付業務等

エントランスホールと映像ホールの受付も重要な業務である。エントランスでは、公開実験や映像の開始時間等の放送、入館者のカウント等も行っている。映像ホールでは、上映作品の案内、観覧券の販売・集計、上映開始前のステージ上での全天周映画の説明ナレーション等も行っている。

受付はいわば博物館の顔であり、お客様の当館のイメージをも左右する。お客様からのご質問、ご要望などを的確に判断・処理すること、マニュアルにはない事例や様々なトラブルに対し臨機応変な対処とすみやかな連絡等が求められる。新人解説員がこうした対処を全て適切に行うことは難しく、先輩解説員等からの助言や指導が必要になる。

適切な対応のためには、朝礼と終礼時に普及・学芸課、解説員相互の連絡をしっかり行い、その日の来館団体や行事、展示の変更点、トラブルなどをきちんと把握する必要がある。朝礼と終礼には、解説員、技術員、学芸・普及課の担当職員が参加し、解説員がこの司会を当番制で行っている。



常設展示の解説

放送やナレーションでは、お客様に聞き取りやすく、好印象を与えるように話すことが重要である。そのために、年1回外部講師による指導を受け、毎日朝礼後に発声練習も行っている。また、耳が不自由なお客様に対しても簡単な案内ができるように手話の練習もしている。

フロアー業務

各フロアーでは解説の他に展示物の欠損やトラブルがないか等、安全の確認も行う。常に快適な状況で展示を見ていただけるよう気を配り、子どもが走り回ったり展示物によじ登るなど危険と思われる場合等は保護者の方に注意して頂くようお願いしたり、放送で注意を促す。フロアーごとにマニュアルがあるが、状況に応じた的確な対応が求められる。

各種イベントの補助

当館では、毎日、「実験シアター」、「実験カウンター」、「サイエンスステージ」、「放電実験室」などで実験を公開している。実験、操作などは技術員が行うが、サイエンスステージの実験の一部や放電実験などでは解説員も参加し、ナレーション等を行う。また、「身近なサイエンス教室(平成13年度は6回実施)」、「おもしろ工作クラブ(同20回実施)」などのイベントにも解説員1名が参加し、指導の補助を行っている。これらは毎回内容が異なるために、担当者は事前に担当研究員と打ち合わせを行い内容、手順、注意事項などを把握しなければならない。

その他

解説員9名のうちリーダー1人、サブリーダー2人をおき、リーダーが解説員のとりまとめを行い、それ以外の8名が勤務シフト作成や研修等の係を分担し、計画や細かい作業を各自が責任を持って行っている。また、月ごとに共通の目標を立て、さらにレベルアップできるように努力し

ている。

当館では多くの業務を館内情報システムにより処理しており、解説員も「解説タイム」の記録、団体予約の確認、毎日の予定表の作成などはコンピューターを使っている。これらの操作は変更時には研究員が研修を行うが、それ以外は経験のある解説員が操作方法を教えている。

おわりに

千葉県の県立博物館11館のうち解説員がいるのは中央博物館と当館だけである。解説員の業務は多岐にわたるので、単なる案内係ではなく、館とお客様を繋ぐために十分な知識を持ち、経験を積んだ専門スタッフでなければならない。さらに、お客様に博物館で快適な時間を過ごしていただ

るよう常に冷静な判断と親切かつ丁寧で心のこもった対応を心掛けなければならない。ここで、強調しておきたいことは当館では解説員自らが自覚をもち、博物館の活動において自らが果たすべき役割について考え、様々な取り組みを実践してきたことである^{*}。現在、解説員の業務量は多く、時間的余裕はあまりないが、こうした自主的な取り組みを行う雰囲気は継承していきたいと考えている。

^{*} 宮下朋子・小島和子・後藤真知子・清澤里枝・新田貴子・宮崎りか・岡本奏・安田美由紀・小倉恵美子（1998）展示解説について 千葉県立現代産業科学館研究報告 第4号：91-105。

科学館と市民とを結ぶ展示運営のサポート

仙台市科学館、仙台市こども宇宙館のオペレーションスタッフとその研修

株式会社乃村工藝社 文化環境カンパニーデザイン1部プランニングルーム ルームチーフ 若月 憲夫
東北支店営業部チーフ(オペレーションスタッフ管理) 津田 実人

はじめに

今ハンズオンがミュージアムの新しい展示の方法として注目を集めているが、科学館では古くから参加体験型の展示が導入されてきた。その多くは、来館者のみで操作体験が可能なセルフガイド方式のものであるが、乗り降りを必要とするような臨場感の高い装置では、人による運営が必要不可欠となる。またデモ実験や展示フロアでの案内、受付業務など、今日の科学館では、主に女性を主体とした展示の運営スタッフを置くことが一般的になってきている。

弊社は、仙台市科学館とこども宇宙館の展示を手がけたことがきっかけで、1990年よりこども宇宙館、翌年から市科学館へのオペレーションスタッフの派遣を開始した。ここにその人材育成を始めとする取り組みについて報告したい。

研修や自己啓発—これまでの取り組み

2001年4月現在18名(市科学館10名、こども宇宙館8名)いるオペレーションスタッフは、身分的には弊社東北支店所属の契約社員であり。仙台市と弊社との契約に基づいて、両館へ人材派遣するという形態をとっている。研修にあたっては、展示の意図や展示品の意味、デモ実験の方法等、内容に関する事項は、勤務館の学芸員より指導を受けているが、接客時の姿勢や話し方、トラブル時の対処方法、化

粧の仕方等の「接遇マナー研修」については毎年4月に弊社の責任で行っている。

加えて、他館フロアスタッフの活動状況の視察会や輪講方式の勉強会を行うなど意識の向上をめざした独自の研修を行うとともに展示物の解説マニュアルの作成等も行ってきた。こうした中から科学館に勤務するという職場意識が芽生え、スタッフが独自に図解入りで展示解説を作成したり、入場の記念品として恐竜の折り紙を制作して配る等の活動も芽生えてきた。

その一方で、仙台市科学館では、1999年度から展示解説のボランティア制度が始まるなど、これまで利用との「接



折り鶴を前にしたフロアスタッフ

オペレーションスタッフ研修項目一覧

年 度	仙台市科学館	仙台市こども宇宙館
1990	接遇研修	接遇研修
1991	接遇研修	接遇研修
1992	接遇研修	接遇研修
1993	接遇研修	接遇研修
1994	接遇研修	接遇研修
1995	接遇研修 福島県立博物館視察 及び意見交換会	接遇研修 福島県立博物館視察 及び意見交換会
1996	接遇研修	接遇研修
1997	接遇研修 盛岡市こども科学館 夢交流博覧会(仙台)視察	接遇研修 盛岡市こども科学館 夢交流博覧会(仙台)視察
1998	接遇研修 救命士講習会	接遇研修 救命士講習会
1999	接遇研修 仙台市内他類似施設への視察 (科学展示発見の視察)	接遇研修
2000	接遇研修	接遇研修
2001	接遇研修	接遇研修

点」を一手に担ってきた彼女たちの中に、自分達自身の存在価値を自問する声も生まれてきた。

スタッフの声を展示設計に活かす

1999年、仙台市科学館で部分改装の計画が持ち上がり、弊社は、その設計を受注・担当することとなった。改装設計に際しては、学芸員の方々が考えた内容やイメージを装置や造作物として具現化していくことが中心となるが、同時に、既存の展示の問題点や人気度等も議論・検討の対象となる。そこで、館サイドの学芸員の方々と打合せに加えて取り入れたのがオペレーションスタッフの声を聞くことであった。

近年、展示評価が注目され、展示改善の手法として利用者の動向や意見を取り入れることが試行されているが「同じ会社」が、運営と設計を手がけるという好条件を活かす試みとして注目したのがオペレーションスタッフである。

この試み、最初は、オペレーションスタッフの側にも展示デザイナーの側にも戸惑いがあった。オペレーションスタッフにとっては、たとえ「展示会社」の所属とは言っても、展示づくりに意見を述べる機会があるとは夢にも思わなかったに違いない。けれども、この展示設計が自分たちの日常勤務する「職場」の問題であり、それに参画できる

素晴らしさを伝えた結果、饒舌に語り出すものが何人か現れてきたのである。

「今、科学館に展示されている象の骨格標本は、生きている時はダンという名前で……」かつて八木山動物園で飼育されていた象のつがいが死んで骨格標本となり、一体は齋藤報恩会の自然史博物館に、そしてもう一体が科学館に来た経緯を、別れることを余儀なくされたカップルの話のように女性らしい感性で語りかけるものがいた。また阪神大震災の直後に熱心に仙台の地層模型を見る人がいて、それは不動産関係の方で活断層について調べにきたことなど展示室の現場にいないと判らない報告もあった。



オペレーションスタッフの声を反映して誕生した「チャレンジラボ」

これらの話は、科学館の展示を一般市民の日常生活という視座から、見つめなおす上で大変に興味深いものがある。利用者と同じ目の高さで市民と接しているのが彼女達であり、それは、次の展示を考える上で大きなヒントを与えてくれるだろう。

展示を解説する「自分の言葉」を求めて—私のミュージアム探し

同時に、オペレーションスタッフたちも、勤務する科学館の魅力を、より深く知り、その中で、何が出来るのかを自主的に考えていくような習慣が芽生えればと考えた。勿論、立場上、彼女達の提案やアイデアが科学館サイドに取り入れられる機会は極めて少ないが、利用者と展示室で接するという職務範囲の中では、即座に実行できることも多いだろう。そこで研修のひとつとして行ったのが、私の展示、私のミュージアム探しのプログラムである。

これは、仙台市内でひとつ「自分のミュージアム」を決めて見学に行き、その展示の中に科学館の展示と関係あるものを発見するというプログラムである。ヒントは、先程のダン（象の骨格標本）の話であった。仙台市科学館には、ダンの話を報じた新聞記事が掲示してあるのだが、それに興味を持った利用者につがいの象の骨格標本が置いてある齋藤報恩会自然史博物館の様子を話せば、より興味が深まるのではないだろうかという発想である。オペレーションスタッフが「自分の言葉」で話せば、それは科学知識を基盤とした解説ボランティアとは、一味違った科学館の魅力ともなるだろう。

具体的には、市科学館に勤務する希望者のみのレポートとし、行き先は重複を避けるためオペレーションスタッフのリーダーが調整し、市内7館に東北歴史博物館を加えた8館を一人ひとりが訪ねることとなった。

何とか科学館の展示とのつながりを見つけようとする努力が見られるものから、単なる展示の視察報告に終わってしまったものまで様々なレポートが提出されたが、その結果以上に、関連性探しという目的をもった他館の見学を通じて、勤務する科学館の展示に改めて目を向けるきっかけになることが重要であろう。オペレーションスタッフの中で、子どもの頃、科学が好きで理科が得意だった者は少ない。そんな生い立ちの彼女たちが、科学（の展示）を「自分の言葉」で解説できれば、それは利用者と科学館との大きな橋渡しになる。同時にスタッフ達にとっても仕事の

に自分を活かせるという意味でモチベーションの向上にもつながっていくのではないだろうか。

求められるミュージアムの連携の中で

さてこのプログラムは、副産物としてミュージアム同士の連携のあり方を考えるヒントを与えてくれる。2000年度、仙台で開催された全国博物館大会では、初めて「対話」と「連携」の博物館が提唱された。ここでいう連携とは、博物館同士の連携であり、博物館と市民や地域社会との連携であり、そして博物館に勤務する職員間の連携である。

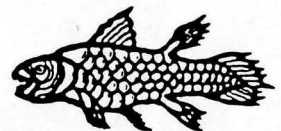
今、すぐにでも出来るミュージアムの連携として、展示解説等の中で、関係する他の館の展示を相互に広報することも興味深いのではないか。科学館に行ったことが文学館を訪ねるきっかけとなったというような状況をつくることは、総合的な学習の時間へのミュージアムの貢献を考える上でも興味深いものがある。オペレーションスタッフが行った研修は、正にその考え方を先取りしたものと言うことができる。

同時に改めて考えたいのが、ミュージアムが果たすべき使命を実現するための職員間の連携という課題の中でのオペレーションスタッフのあり方と言えよう。館長を頂点とする職員のピラミット構造の中で、その裾野に位置するのが彼女たちオペレーションスタッフであるが、同時に最も頻繁に利用者との接点を持ち、接客のフロントにいるのが彼女たちである。ミュージアムのマーケティングという視座に立つとき、その情報をフィードバックする仕組みを持つことも興味深い試みではないだろうか。

美術

は < 製

〈各 種 生 物〉
製・骨格標本・レプリカ
加工/販売/リース



有限 東洋近代美術研究所

製作所 〒272-0816 千葉県市川市本北方2-18-1 直通 ☎047-337-5678
☎047-337-5883
本社 〒272-0834 千葉県市川市国分5-3-25 FAX 047-338-1978
☎047-374-1564

展示と見学者を結ぶボランティア活動

国立科学博物館における実践と新たな試み

国立科学博物館教育部 石川 昇

解説員はなぜ必要か

博物館において、解説員が見学者に展示を分かりやすく説明することは、見学者にとって大変有益なことであり、生涯学習社会の要請でもある。解説パネル、音声解説機器、コンピュータのタッチパネルなどではなく、あるいはそれらがあってもなお人が解説を行う理由は、相手のニーズ、レベル、状態に合わせた、暖かな感情がこもった解説ができるからである。そして、解説とは物事を詳しく分析してよく分かるように行う説明であり、一般に解説者とは専門的な知識を持ち分かりやすく説明ができる人であるとすれば、その役割を担うべきは学芸員・研究員である。

しかし、学芸員・研究員の職責は多岐にわたり、専ら展示解説を行うことはできない。そこで主たる業務として解説を行う者が必要となるが、一方的な説明ならまだしも、質問を受ける場合は専門的な知識を要するし、学芸員・研究員でさえ専門外の分野をカバーすることは容易なことではない。そこにディレンマがある。

展示と来館者を結ぶボランティア活動

国立科学博物館ではボランティアが展示と見学者を結ぶさまざまな活動を行っているが、その中で解説のようなものは平成10年11月に開始した「ガイドツアー」である。

ガイドツアーはハイライトコースとテーマコースの2種

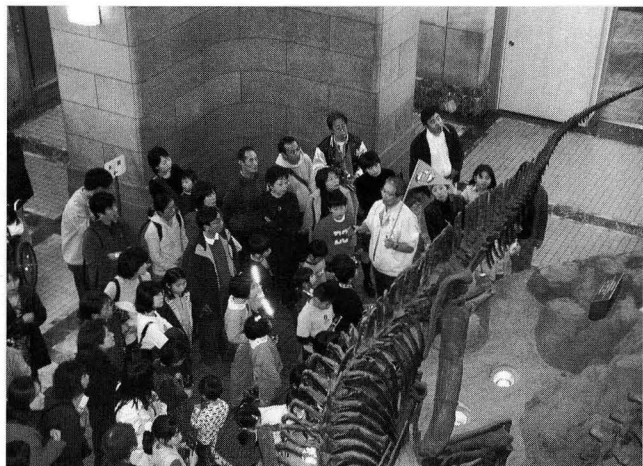
類がある。前者は、館内の見どころを約1時間かけて案内、説明して回るもので、毎日、10:30、13:30、14:00の3回出発している。ガイドの対象となる展示は館で25を選択、提示し、ボランティアは自分の行いたい展示を選んで案内する。後者は、特定のボランティアが特定のテーマで自分でシナリオを作って展示を案内、説明するもので、実施はシナリオ等について研究官のチェックを受けてから行う。

また、平成13年11月から開始した活動に「展示室ガイド」がある。みどり館2階の動物分類展示室で、午前午後各2時間、展示の案内・情報提供、見学者との交流を行う。展示室には秋田犬ハチ、カラフト犬ジロ、ニホンオオカミ、ニホンカワウソなどの剥製をはじめ、昆虫や鳥類など青少年に人気のある展示が多く、案内のし甲斐がある。そして、触れる標本や資料を用いるなどの工夫もしている。

この二つの活動以外にも、参加体験型展示「たんけん広場」における指導助言なども解説のようなものである。

ガイドツアーは別名「展示案内」と言い、展示室ガイドも「ガイド(=案内)」という名称である。このように解説のようなものを行いながら「解説」でも「説明」でもなく「ガイド」という表現にしたのは二つの理由がある。

一つは、見学者に対し、あらかじめ研究官による解説ではないことを知っていただきたいということであるが、そ



「ガイドツアー」を行うボランティアと参加者



「展示室ガイド」のボランティアと見学者の交流

れ以上に、ボランティアが説明して見学者が聞くという形ではなく、ボランティアが案内して見学者といっしょに展示を楽しむという形を目指したのである。「説明」をくする〈される〉の関係だとコミュニケーションが一方的になりがちだが、「案内」であれば、知識・情報・感情のコミュニケーションが生まれやすいのではないかと考えた。

来館者は博物館見学に何を求めるか

見学者のどれくらいの人が「見て学ぶ」あるいは調べるという目的意識を持って、各展示の属性や価値を確認したり評価しながら「見学」をしているのだろうか。特別展や企画展の際は目的を持って見学する人が多いが、常設展示の場合、多くの人は、自分の興味関心を引く展示に出会うまでは、何となく展示を見ているのではないだろうか。

そのような見学者にとっては、館の人々とのコミュニケーションも博物館見学における満足感を高める一部になるのではないか。人は何か面白い知識を得たり感動したりすると、そのことを他の人に伝えたいと思う。当館では、ボランティアが平成元年から「見学相談コーナー」（平成6年3月から「案内所」と改称）で案内・情報提供、見学の相談への対応を行ってきたが、そこでは質問や苦情などのほか、「面白かった」「すごい〇〇ね」「ハチ公にあえてよかったわ」などという感想や、展示に関する知見の披露が寄せられ、ボランティアは見学者と交流を行ってきた。

このことから、見学者の博物館見学における満足感の要因は見学者の〈見る〉〈知る〉という基本的欲求の充足だけでなく、食堂で〈食べる〉、売店で〈得る〉などとともに、〈人と交わる〉ことの充足もあると考えたのである。

ボランティア活動者の養成

ガイドツアーの研修は活動方法と見学者への対応についてが中心で、説明内容については展示と展示パネルを見ながら、資料を読み込んで学習することが求められる。そして、活動希望者は実施の前には職員の前で試演（リハーサル）を行い、見学者との対応、基本的な用語の使い方などをチェックされ修正する。場合によっては試演を数回行う。

展示室ガイドの研修は、ビデオ録画した研究官の展示解説を視聴する形式にし、概論となる動物の分類については座学とビデオ視聴にした。さらに展示解説のビデオは頒布し、関連資料も用意した。展示を前にした研修は150名近くのボランティアが受講を希望するものの、微小な展示も多く一度に15名以下でないと展示を見ることができないため、

ビデオ撮影、録画、視聴という方法となった。

活動にあたってボランティアが留意する点としては、一つは誤った情報を伝えないこと、二つめは「案内させていただく」姿勢で独りよがりにならず、相手に合わせて行うこと、三つめは専門家でないことを肝に銘じて謙虚に行うことであり、終了する際は参加した見学者に「お聞きいただきありがとうございます」と言うようにしている。

ボランティア活動の成果

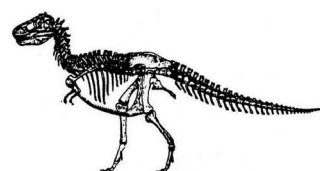
活動を希望するボランティアは自然科学に興味関心を持っている人が多く、好きなことを学習して他の人に伝えるという活動はやりがいと喜びを感じることができると、その学習は楽しく、積極的なものになった。ボランティア同士の情報交換、相互学習も活発になった。

好きなことを学習することは楽しく、人に伝えることも楽しい。ボランティアの楽しさと熱意が見学者に伝わるとき、見学者はボランティアの展示に対する愛着と伝えたいという熱意を感じる。自分たちと同じ市民がボランティアとして、謙虚な姿勢で一生懸命学習した成果を伝えようとする姿勢に共感する。人によってはボランティアへの敬意と感謝の念も生まれる。そして、見学者は専門家から受ける解説とは別に、ボランティアが行う活動に意味と意義を感じる。出会いと交流の楽しさを実感する。

見学者にとってはボランティアとの交流も博物館体験であり、博物館の魅力の一要因となっているようだ。ガイドツアーに何回も参加する見学者がいる。礼状を寄せてくれる見学者がいる。ボランティアも与えるだけでなく、見学者からさまざまな情報をいただいたり、励ましを与えられる。

科博におけるボランティア活動は、ボランティアが来館者とつくる教え合い学び合う交流の場である。

※世界の化石・
鉱物・恐竜・化石
人類・動物骨格
標本及び模型の
輸入専門業者



ティラノサウルス・REX

株式会社 **ゼネラルサイエンス**
コーポレーション

〒107-0052 東京都港区赤坂 3-11-14 赤坂ベルゴビル802
TEL 03 (3583) 0731代表 FAX 03 (3584) 6247

ろう者の理解の普及をめざした子供博物館が、米国で開館

「あなたは、何がろうの原因になっているかを知りたいと、考えてみたことがありますか？」

「あなたは、どうやって音が聞こえるかを知りたいと、考えてみたことがありますか？」

「あなたは、とつぜん耳が聞こえなくなってしまった場合のことを、考えてみたことがありますか？」

「あなたは、家族や友だちに自分たちの言いたいことを、お互いにどのように伝えあっているかを、考えてみたことがありますか？」

「あなたは、電話のしくみを、考えてみたことがありますか？」

こういった質問に対する答えは、2001年10月28日にシカゴで新しく開館した子ども博物館「The Children's Museum on Deafness」で用意されている。同館は、非営利法人である国際ろう及び芸術センター (International Center on Deafness and the Arts シカゴ www.icodaarts.org/) が、聴者 (健聴者) を対象に、ろう者 (聴覚障害者) による社会貢献と、聴覚障害及びろう者が織り成す「ろう文化 deaf culture」への理解を深めるための施設としてに設けられた。同館では、小学生と中学生を主な対象者としており、ろう者劇団による芝居の上演が行われる小劇場 (90席) と、「聴覚障害の科学」・「ろうへの適応」・「ろう者の文化」を紹介した常設展示、および博物館見学の思い出ビデオが作れるスタジオが設けられている。「聴覚障害の科学」のコーナーでは、「音とは何か」・「聴力のしくみ」・「ろうの原因」によってテーマが構成されている。また「ろうへの適応」のコーナーでは、「アメリカ手話 (ASL)」・「補聴技術の発達」・「バリアフリー住宅」によってテーマが構成されており、「バリアフリー住宅」では、ろう者が安全な生活を営めるように様々な技術的な装置を備えたモデルハウスがつくられている。「ろう者の文化」のコーナーでは、「著名なろう者の貢献」・「ろう者によるアート表現」・「ろう者と聴者の対話の壁」によってテーマが構成されている。「著名なろう者の貢献」では、人類の歴史の発展に貢献した著名なろう者 (エジソン等) の残した業績と、彼らの苦難に満ちた生涯がわかりやすく紹介されている。「ろう者によるアート表現」では、ろう者の間で日常的に使っている様々な

表現やイメージを制作の意図を伝える記号として表現した現代絵画の作品を紹介している。事前に連絡をしておくと、手話通訳者による展示解説が観覧者に対して行われる。元ろう学校の教師であり、国際ろう及び芸術センターの館長であるジャッキー・キメルによれば、ろう者である子どもと、聴者である子どもには、同館は次のような学ぶ機会を提供している。「彼ら (ろう者) には、ろう者をとりまく社会環境の改善の変遷の歴史的事実を知り、また聴力を失ったことについての正しい科学的理解を植え付け、そして自分たちが決して孤立していなく、支えてくれる仲間が沢山いることを知り、さらに人間としての尊厳を持たせてくれる」。そして「彼ら (聴者) には、学校の教室に隣に座っている子 (ろう者) について理解するための豊富な情報源を提供してくれる」。www.icodaarts.org/cmd.html

遺伝子解読に関する常設展が、シカゴ科学産業博物館にオープン

アメリカの博物館で遺伝子解読を取り上げた初めての常設展が、このほどシカゴ科学産業博物館で2002年1月11日にオープンした。「Genetics: Decoding Life」と題した同展では、クローン技術など遺伝子工学の最先端が紹介されている。また同展にあわせて、遺伝子工学の最前線で活躍する研究者を招いたシンポジウムが3回にわけて開催されており、既に1月20日に開催された第一回のシンポジウムのハイライトがビデオファイルとして同展のホームページからダウンロードできる。www.msichicago.org/exhibit/genetics/symposia_01.html

ゲノム研究の最前線を紹介した巡回展が、カナダ自然博物館で2003年春にスタート

オタワにあるカナダ自然博物館は、このほど1月23日に発表したところによると、ゲノム・カナダとカナダ国立衛生研究所 (CIHR) の協力を得て、同国で初めてのゲノム研究に関する巡回展を、同館を皮切りに2003年春にスタートさせることになった。「Gee! In Genome」と題したこの巡回展では、カナダ国民にゲノム研究の最前線をわかりやすく紹介することを目的にしている。同館での12週間の会期後、カナダ各地の博物館で開催予定である。

熱帯雨林に棲むチョウを紹介した生態展が、アメリカ自然史博物館で開催中

真冬のニューヨークでは、多くの市民は寒さとそれに伴う退屈な日常から逃れるために博物館を訪れるそうだ。美術館に行く人も多いが、セントラル・パークの西側にあるアメリカ自然史博物館へも多くの人が訪れている。当然のことながら、館側でも観覧者を楽しんでもらうために、いろんな工夫を凝らしているわけだが、現在アメリカ自然史博物館でも例外ではない。現在同館の館内では特設の放蝶園(約130m²)が設けられ、その中で熱帯に棲むアゲハチョウ科とシロチョウ科およびタテハチョウ科に属するチョウの生態が見られる。この企画展では、生きたチョウが放蝶園の中で観覧者によって間近に見られるだけでなく、チョウのからだのしくみ、成長、外敵からの防衛、チョウの進化、チョウをめぐるエコロジー、チョウの保護についてもわかりやすく紹介している。また特設のホームページでは、家庭でできるチョウの飼育についても親切な解説を行っている。会期：2002年5月27日まで。www.amnh.org/exhibitions/butterflies/

英自動車産業の歴史を紹介した常設展示が、英コベントリーの交通博物館にオープン

イギリス中部の都市コベントリーは、同国における自動車産業の発祥の地として知られており、1980年に開館したコベントリー自動車博物館はイギリスにおける自動車産業の発展の歴史を紹介したところである。さる1月に、最初の商業用自動車が生産された1896年から、同地における自動車産業の最盛期を迎えた1948年までの、コベントリーにおける自動車産業の歴史をたどった常設展示「ランドマークス Landmarkes」が、大々的な更新を経てオープンした。更新される前の展示では、自動車の胴体展示が主体であったが、新しく更新された展示では、コベントリーの目抜き通りの一部の日常的な風景が再現され、音響や人物を撮した映像の上映によって生き生きとしたものになった。Museum of British Road Transportation Coventry www.mrt.co.uk

宇宙船「リバティ・ベル7」を紹介した特別展が、ボストン科学博物館で開催中

「マーキュリー計画」は、有人宇宙船の打ち上げに成功した旧ソ連に遅れをとったアメリカの有人宇宙飛行計画で、1958年から1963年にかけて7名の宇宙飛行士が宇宙飛行を行

った。その2回目の宇宙飛行に使われたのが、「リバティ・ベル7 Liberty Bell 7」である。同号は、1961年7月21日にガス・グリソム飛行士を乗せてフロリダ沖の大西洋に着水したが、不幸にも着水後のトラブルでフロリダ沖の大西洋の深海底に沈んでしまった。1999年5月になって、ようやく約4,800mの海底に眠るリバティ・ベル7が発見され、7月に引き揚げられた。ボストン科学博物館では、この引き揚げられた実物のリバティ・ベル7を紹介した特別展が、2002年1月26日から3月24日まで開催されている。マーキュリー計画の全貌を明らかにしようとした同展では、実物のリバティ・ベル7が見られるだけでなく、グリソム飛行士が飛行中に聞いたさまざまな音声や目にした光景が見られる。

アメリカ自然史博物館、海洋生物の常設展ホールの改装に着手

次にアメリカ自然史博物館を見学しても、同館の目玉展示である全長が約31メートルのシロナガスクジラは見れないかもしれない。このほど、大々的な展示更新のために、観覧者に最も人気があったこの巨大な哺乳類を紹介した常設展示ホールが2002年1月に閉鎖された。2,900m²の展示スペースは、従来の骨格標本の展示に加え、コンピュータの検索端末や映像展示が大幅に増え、最新の研究成果が紹介されることになっている。2500万ドルの総工費をかけた新しい施設は、1,500万ドルをこの改装に寄付したミルステイン夫妻(ともに同館の理事)にちなんで、「Paul and Irma Milstein Hall of Ocean Life」に名称が変わることになっている。オープンは、2003年夏の予定。www.amnh.org/exhibitions/specials/ocean/index.html

冬季五輪に併せて、ユタ自然史博物館でアメリカ先住民の歴史を紹介した常設展をオープン

ソルトレークシティでの冬季オリンピック(2月8日-24日)は、世界中から人々を呼び寄せるが、同市にあるユタ自然史博物館は、このビッグイベントに併せた常設展「Utah's First Nation: Peoples of the Great Basin and Colorado Plateau」を、大会の開催に先立って1月18日にオープンさせた。同展はユタ州を中心に、グレートベースンおよびコロラド高原に先史時代から住む先住民族の歴史と今も継承されている文化、そして現在の生活ぶりを紹介したものである。

* (やすい・りょう) E-post: RGYasui@obirin.ac.jp

3月4月の特別展

札幌市青少年科学館

春の特別展「ふれあい宇宙フェスティバル～“きぼう”の世紀へ～」
3月26日～4月7日

岩手県立博物館

テーマ展「県北畑作農家の生活用具」 1月22日～5月6日

ミュージアムパーク茨城県自然博物館

第24回企画展「コリアの自然史—大陸と日本を結ぶ生きものたち—」
3月16日～6月16日

地質標本館

「切手と鉱物—世界の切手コレクションから—」
4月16日～6月16日

栃木県立博物館

テーマ展「木の良さ再発見」 1月13日～4月7日

群馬県立自然史博物館

第16回企画展「ことばで遊ぶミュージアム」
3月9日～5月12日

さいたま市青少年宇宙科学館

企画展IV「日本の淡水魚展」 1月18日～3月24日

埼玉県立自然史博物館

企画展「ちちぶの鳥やけものたち」 1月5日～6月9日

千葉県立中央博物館

企画展「僕らの作った森」 3月2日～4月7日
生態園トピックス展「これが花？」 3月5日～4月21日

交通博物館

写真展「国境の除雪列車」 12月18日～3月10日

TEPCO銀座館

「平成13年度 日本子どもの版画展」 3月21日～31日

国立科学博物館

企画展「ノーベル賞100周年記念展」 3月19日～6月9日

機械産業記念館（TEPIA）

第14回展示「循環型社会を目指す新技術展～豊かなエコライフの実現に向けて～」パートII 1月18日～3月22日

たばこと塩の博物館

企画展「古代アメリカの動物デザイン」 2月23日～4月7日
特別展「武家の精華～松井文庫の美術工芸品～」(仮称)
4月14日～5月26日

府中市郷土の森博物館

「2001 ワイルドライフ写真大賞展」 1月27日～3月31日

東京農工大学工学部附属繊維博物館

第58回特別展「シルク展」 4月17日～21日

多摩六都科学館

春の企画展「野鳥と友だちになろう！～武蔵野の鳥～」
3月2日～31日

東京都高尾自然科学博物館

特別展示「自然を写す（第2回）」 12月8日～3月31日
特別展示「日原の森—原生林に生きる—」 4月6日～7月7日

馬の博物館

テーマ展「馬の玩具展」「馬の切手展」 1月5日～3月17日
春季特別展「働く馬」 3月23日～5月12日

横浜こども科学館

企画展「体感！チャレンジ広場」 11月3日～3月10日

上越市立水族博物館

春季特別展「メダカのくらす水辺の世界」 4月20日～5月26日

新潟県立自然史博物館

開館20周年記念展「21世紀夢のロボット展」
3月23日～4月7日

福井県児童科学館

企画展「エンゼルランドロボットフェスタ」(仮称) ロボットはともだち！
3月21日～31日

いしかわ動物園

春の特別展「石川の自然—加賀と能登」 3月20日～5月6日

佐久市子ども未来館

開館1周年記念特別企画展 不思議体験！サイエンスボックス展
3月15日～5月6日

中津川鉱物博物館

第10回私の展示室「東濃の甌穴写真展」 12月2日～3月10日

東海大学自然史博物館

ヒサクニヒコさんの迫力恐竜原画展 3月21日～4月7日

名古屋市科学館

企画展「光とあそぼう」 3月16日～31日
特別展 目で見る「がん」展 4月13日～6月30日

半田空の科学館

2001年「自然の記録展」 2月2日～3月10日

トヨタ博物館

企画展「クルマのかたち いろいろ展～チャンピオン集合！～」
2月19日～4月7日

滋賀県立琵琶湖博物館

湖の十字路口—野洲川平野の弥生・古墳時代—
3月20日～5月12日

兵庫県立人と自然の博物館

企画展「ワンダフルカラー」 2月17日～6月16日

明石市立天文科学館

「ハッブル望遠鏡のとらえた宇宙写真展」 3月1日～4月7日
「星団・星団（メシエ天体）写真展」 4月10日～5月26日

吉備高原ニューサイエンス館

特別展「マグネット展」 4月27日～5月6日

広島市こども文化科学館

「たのしい工作室1年のあゆみ展」 3月15日～31日

広島市健康づくりセンター健康科学館

特別展「よい加減な和の暮らし」 3月14日～4月7日

広島市交通科学館

春休み企画展「はたらくのりもの大集合ーたんけん！港ののりものー」 1月29日～4月7日

防府市青少年科学館

企画展「山口のキノコ展」 2月16日～3月10日

企画展「春休みわくわく科学教室」 3月28日～4月5日

愛媛県立博物館

テーマ展「えひめ生きもの写真展」 2月1日～3月24日

テーマ展「ワシタカ・フクロウのなかま」4月2日～5月26日

愛媛県総合科学博物館

館蔵品展「翼大空へ 航空機と空港を知る」

3月17日～4月14日

福岡県青少年科学館

「からだを探検！ふしぎゾーン」～ようこそ！からだの内部へ～ 2月17日～4月4日

「世界のおもちゃ・大集合」展 わかるかな？からくりの秘密～ 4月13日～5月12日

宮崎県総合博物館

開館50周年記念特別企画展「生きものたちからのSOS」

2月2日～3月17日

展示更新

むつ科学技術館

[展示室名] 自然の不思議な世界

[主なコーナー(新展示物)の名称]

波の視覚化 展示名：弦のうごき

風の景色 展示名：風の景色

[更新の展示面積] 13m²

[オープンの期日] 平成14年3月中旬

[準備期間] 平成13年10月～平成14年2月下旬

施工期間：平成14年3月10日～3月18日

[担当業者] 設計・施工・展示：財団法人日本科学技術振興財団

[総工費] 9,450,000円

**東海大学自然史博物館**

[展示室名] 全館

[主なコーナーの名称]

1階 ディスカバリールーム

・発見の部屋

2階 氷期の世界 他

3階 恐竜の世界

[更新の展示面積] 1,423m²

[オープンの期日] 平成14年1月2日

[準備期間] 基本設計：平成12年10月～平成13年4月

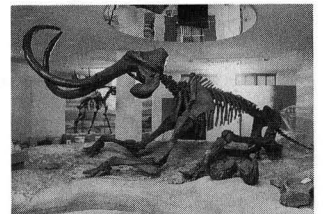
実施設計：平成13年4月～8月

施工期間等：平成13年9月～12月

[担当業者] 展示設計・施工：東海教育産業株式会社

建物内改修：鈴与建設株式会社

[総工費] 改修費 140,000,000円

**ムシテックワールド**

(ふくしま森の科学体験センター)

[展示室名] なぜだろうランド

[主なコーナー(新展示物)の名称]

SUKAGAWA フライトアカデミー

[更新の展示面積] 214m²

[オープンの期日] 平成13年12月22日

[準備期間] 基本設計：平成13年5月～6月

実施設計：平成13年7月～9月

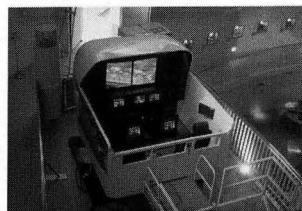
施工期間：平成13年10月～12月

[担当業者] 設計：株式会社 日本空港コンサルタンツ

施工：三菱プレシジョン株式会社

展示：株式会社 アイエスシー、株式会社 日本エアシステム

[総工費] 2億円

調査・企画・デザイン・設計・製作・施工・
監理・運営およびコンサルティング・プロデュース

より良い「社会交流空間づくり」にむけて…。


株式会社 丹青社

〒110-0005 東京都台東区上野5-2-2 TEL 03-3836-7221(代表)

札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・鳥取・福岡

URL <http://www.tanseisha.co.jp>

INTERIOR/EXTERIOR/DESIGN/EQUIPMENT
ONY KOBO CO., LTD.
 東京都千代田区神田神保町2-7-3シグマ神保町4階
 TEL (03) 3221-1102(F) FAX (03) 3221-1185



動物園／水族館／博物館
 企画・設計・施工

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向／教育用地学標本



地学標本(化石・鉱物・岩石)
 古生物関係模型(レプリカ)

大英博物館／恐竜復元模型

since 1974

●常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)

髯東京サイエンス
 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル
 TEL.03(3350)6725 FAX.03(3350)6745
<http://www.tokyo-science.co.jp> E-mail:info@tokyo-science.co.jp

ミュージアムの集客を強力にサポート
 新たなコミュニケーションメディア【イベントナビ】



イベント情報ポータルサイト
EventNAVI
<http://www.eventnavi.ne.jp>

全国のイベント情報年間約10万件を発信するイベントナビ。
 企画展・特別展などへの来場促進に、ぜひご活用ください。

イベント情報
 無料登録受付中！

株式会社 乃村工芸社
 本社：東京都港区芝浦4-6-4 〒108-8565 電話 03-3455-1171(代)
 ホームページ <http://www.nomurakougei.co.jp>
 ディスプレイおよび建築の調査・コンサルティング・
 企画・設計・デザイン・プロデュース・演出・制作施工
 ISO9001認証取得(文化環境カンパニー) ISO14001認証取得(IMCカンパニー)

全科協ニュース編集委員会

NHK放送博物館 チーフディレクター 河野光子
 滋賀県立琵琶湖博物館 企画調整課長 高橋啓一
 ミュージアムパーク茨城県自然史博物館

資料課長 都賀和男

国立科学博物館 普及部 普及課長 武田良正
 国立科学博物館 普及部 普及課専門職 原田紀子

全科協事務局

国立科学博物館普及部普及課 村上 剛 園山千絵
 Tel.03-5814-9857・9858 Fax.03-5814-9898

発行日 平成14年3月1日

発行 全国科学博物館協議会©

〒110-8718 台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

印刷 島崎印刷株式会社

歴史体感

ロボットが誘う、歴史伝説の世界

伝統文化の保存と伝承を目的とした施設、
 建設にも積極的に参加しております。



佐渡歴史伝説館／日蓮聖人 佐渡法難

文化施設・商業施設・動刻・ディスプレイ・デザイン・設計・制御演出・施工

kokoro
 株式会社 ココロ

〒205-8556 東京都羽村市神明台4丁目9番1号
 TEL: 042-530-3939 FAX: 042-530-4050
<http://www.kokoro-dreams.co.jp/>